



OS番号	OSテーマ	オーガナイザ
OS1	エネルギー需給システムにおける経済モデルと物理モデル	大塚 敏之(京都大学)
OS2	異分野をつなげる動的システム論	大塚 敏之(京都大学)
OS3	「場のイノベーション」を考える	小林直人(早稲田大学)
OS4	ImPACT TRC太素状ロボット研究開発の現状と将来展開	松野 文俊(京都大学)
OS5	人間共生型社会を実現する記号学と人工知能	深尾 隆則(立命館大学)
OS6	リモートセンシングに係る社会の発展・文化の深化への寄与	伊東 明(日本リモートセンシング学会)
OS7	文化とコンピューティング	田中 覚(立命館大学)
OS8	社会シミュレーション	遠藤 薫(学習院大学)
OS9	シミュレーション&ゲーミングの可能性	松井 啓之(京都大学)
OS10	超スマート社会の実現に向けた、エネルギーのモデリング・最適化	榎原 一紀(富山県立大学)
OS11	システム科学技術-システムの時代に向けて	玉置 久(神戸大学)
OS12	生物って?,ロボットって?	大須賀 公一(大阪大学)
OS13	ミクロとマクロをつなぐ社会的知能・合理性	高橋 泰城(北海道大学)
OS14	地域社会でのICT手法の定着へ向けたオープンイノベーション -滋賀県での取り組みを基にして-	酒井 道(滋賀県立大学)
OS15	経営高度化へのマトリクス・アプローチと意思決定プロセス化の研究	大場 允晶(日本大学)
OS16	イノベーションデザイン	永井由佳里(北陸先端科学技術大学院大学)
OS17	情報科学における技術的特異点と限界突破	松原 崇充(奈良先端科学技術大学院大学)
OS18	望まれる持続可能な社会の実現に向けて	増井 利彦(国立環境研究所)
OS19	構造物に依存しないソフト防災の現状と課題と可能性	有馬 昌宏(兵庫県立大学)
OS20	ICTメディカル・ヘルスケア	田中 覚(立命館大学)
OS21	横幹連合「コトづくり」至宝に関する取り組みとその準備状況	川中 孝章(東京大学)
OS22	情報技術とWell-being	安藤 英由樹(大阪大学)
OS23	新しいもの造りを目指すSafety2.0	高橋 聖(日本大学)
OS24	社会的課題解決に向き合う学術の新しい潮流 ~「知の統合」の人材育成と推進への期待~	原 辰次(中央大学)
OS25	健康ビッグデータ分析とヘルスケア	小木哲朗,渡辺美智子(慶應義塾大学)

Fig. 2: オーガナイズド・セッション一覧

くりの社会実装」を実現することで、Society5.0をもたらすことに貢献できる場にしたと考えました。

上記の大会テーマや基本方針を受けて、今年の横幹連合コンファレンスでは、いくつかの企画を立ち上げました。

まず、プレナリーパネル討論「社会的課題解決に向き合う学術の新しい潮流~「知の統合」の人材育成と推進への期待~」(司会:中央大学研究開発機構教授・日本学術会議連携会員 原辰次氏)です。現代社会を取り巻く様々な社会的課題の解決には異分野の「知」を統合することが不可欠です。また、その統合を促進するメタレベルでの「知」も必要となります。横幹連合はそのよ

うな理念を「知の統合」という言葉で世界に先駆けて打ち出し、日本学術会議における10数年来の議論をリードしてきました。今般、日本学術会議は、「知の統合」の推進に必要な、「知の統合」を担う人材の育成とその評価の仕組み、さらに教育・研究・イノベーションの三位一体の推進体制について報告書をまとめ、公表しました。本パネル討論ではその報告を中心に、わが国のイノベーションを牽引しグローバル社会で競争力のある社会を築く新しい学術の在り方について議論しました。パネリストとしては、大学、研究助成機関、そして産業界を代表する方々、加えて大学の若手研究者にも加わっていただき、それぞれの立場から知の統合人材の育成について議

論していただきました。パネリストは以下の方々です：

- 科学技術振興機構副理事，日本学術会議副会長 渡辺美代子氏
- (株) 日立製作所研究開発グループ技術戦略室長 赤津雅晴氏
- 東京大学 数理・情報教育研究センター特任教授，明治大学 MIMS 所員 北川源四郎氏
- 情報・システム研究機構監事，横幹連合会長，日本学術会議連携会員 鈴木久敏氏
- 慶応大学理工学部物理情報工学科助教 堀豊氏
- 大阪大学大学院博士後期課程「超域イノベーション博士課程プログラム」履修生 澤井伽奈氏

いずれのパネリストからも，知の統合人材の育成が重要であることが表明されました。また，若手研究者からは，知の統合領域での活動は刺激的だが，専門領域での研究活動に負荷がアドオンされるだけで，指導教員によっては研究活動として評価してくれないなどの悩みも紹介されました。若手研究者がその能力を最大限に発揮でき，気持ちよく研究できる「場」の構築が喫緊の重要課題であることが再認識されました。

次に，特別講演です。今年のコンファレンスでは，前述の大会テーマに基づき，第一線で活躍されている京都の文化人を講師としてお呼びしました。華道「未生流笹岡」家元の笹岡隆甫氏です。演題は「いけばな～2020年それ以降に向けて～」です（Fig. 3）。笹岡氏は，京都大学工学部建築学科を卒業されてから未生流笹岡の三代目家元となりました。つまり，理系と文系の両方に通じている希有な文化人です。氏によれば，いけばなという文化には厳格な理論があり，その理論を応用するという意味では理系的な分野とも言えるが，それだけではなく，人の感性や社会の要求という文系的な素養も必要となるそうです。いけばなは，まさに，文理融合を实践する文化の場と言えそうです。笹岡氏の様々なチャレンジ，例えば，産業界の新製品の展示やTV番組での現代的なライティングと融和させたいけばななどのお話は，非常に刺激的でした。伝統とは革新の連続であり，それを忘れては真の文理融合はあり得ないのだということが良く分かる特別講演でした。

また，今年度の新しい試みとして，横の幹をより大きくすることを念頭に，様々なオーガナイズド・セッションでの議論事項を俯瞰的に一望できること，そして，学生などの若い世代の参加を促すことを目的として，ポスター発表のインタラクティブ・セッションを行いました（Fig. 4）。30件の発表が集まり，そのうち学生の発表は21件でした。この21件に対して横幹連合理事による投票を行い，2件のベストポスター賞が選ばれ，横幹連合の鈴木会長より賞状が授与されました。インタラクティ



Fig. 3: 特別講演（華道「未生流笹岡」家元の笹岡隆甫氏）



Fig. 4: ポスターセッション

ブ・セッションは懇親会の直前に，懇親会と同じ会場で開催され，賞状の授与は懇親会のイベントのひとつとして行われました。懇親会の最中でもポスターを肴に議論される様子が多数見られ，その意味でも，この新企画は非常に盛り上がりました。成功だったと思います。

懇親会の中締めの前には，恒例により，次回第9回コンファレンスについて，実行委員長の椿美智子先生より，会場となる電気通信大学（東京都調布市）をご紹介いただき，開催日時が2018年10月6日（土），7日（日）となることがアナウンスされました。2018年に100周年を迎える電気通信大学で行われる第9回横幹連合コンファレンスに，どうぞお越し下さい。新宿，渋谷からも近い交通の便が良い会場です。

最後に，コンファレンスにご参加いただき，討論を盛り上げていただいた皆様に，実行委員会・プログラム委員会一同より，深く御礼申し上げます。ありがとうございました。